Africans at Home and Abroad
Africans at Home and Abroad
マーカス・ガーヴィーの運動と南アフリカ
Marcus Garvey's Movement and South Africa

荒木圭子
ARAKI Keiko

1. はじめに

本報告では、1920 年代の南アフリカにおけるアフリカ人の抵抗運動について取り上げます。のちの反アパルトヘイト闘争の前史として位置づけられますが、この時期は人種差別的政策の強化や産業の発展に伴う社会構造の変化のなかで、アフリカ人ナショナリズムが芽生え始めた時期でした。アフリカ人による抵抗運動は、国内の人種差別的待遇に対するものでしたが、実は南アフリカ外のアフリカ系人の影響を多分に含むものでした。本報告では、マーカス・ガーヴィーの運動の影響についてご紹介したいと思います。

アフリカ大陸におけるガーヴィーの影響については、1950 年代から 60 年代にかけて反植民地主義独立闘争を担った指導者たち、例えばガーナのンクルマやケニアのケニヤッタが、ガーヴィーの著作を読んで思想的な影響を受けた、というのが主に挙げられます。これに対して南アフリカでは、20 世紀初頭、ケープタウンを中心に在住していた西インド諸島出身者を通して、同時代的・実体的運動が展開されました。

なお、報告ではガーヴィーイズムという名称を使用しますが、これは厳格な定義を持つものではなく、ガーヴィーや万国黒人地位向上協会（Universal Negro Improvement Association: UNIA）の名前を使った運動、という程度で、その中身は流動的であると理解していただければと思います。また、当時、南アフリカの黒人は「原住民」と呼ばれていましたが、差別的ニュアン

Copyright © 2014 The Institute for American Studies, Rikkyo University

スを含むため、本報告では「アフリカ人」という呼称を使用します。

2. ケープにおける西インド諸島出身者

まず、当時の南アフリカの状況について少し説明したいと思います。19世紀後半、ダイヤモンドと金が発見されたことによって南アフリカは産業発展を遂げ、多くのアフリカ人が都市部への出稼ぎ労働者となっていました。1913年に制定された原住民土地法はアフリカ人の所有できる土地を制限するものでしたが、この土地は全国土の7パーセントにしかすぎませんでした。かつて土地を有していた中流階級に属するアフリカ人は、ほかの大衆とともに、白人農園や都市部へ出稼ぎに行くことを余儀なくされ、南アフリカの産業のなかに低賃金労働者として取り込まれていきました。資本主義経済の進展と人種差別的政策の強化により、支配階級層の白人化とアフリカ人の労働者階級化が進むなか、アフリカ人たちは「人種」という共通点で結ばれ、大衆運動を組織していくことになります。

ガーヴィーの運動を南アフリカにもたらした最大の媒体は、UNIA機関紙『ニグロ・ワールド』です。『ニグロ・ワールド』は、アメリカ各地のほか、カリブ海地域やアフリカ地域にも流通しました。まさに大西洋地域における「想像の共同体」としての「黒人世界」が、新聞を媒介として形成されていたといえます。

この新聞を南アフリカに持ち込んだのが西インド諸島出身の黒人船員です。ケープタウンは大西洋とインド洋を結ぶ貿易の拠点として発展していましたが、ここに入港する船で働いていた西インド諸島出身の黒人たちは、『ニグロ・ワールド』をもちこんだだけでなく、独自のコミュニティを形成し、ガーヴィーの運動母体であるUNIA支部を設立するなどして現地のアフリカ人による運動に参加しました。

南アフリカでガーヴィー運動を推進した組織としてあげられるのは、UNIAのほか、アフリカ民族会議（African National Congress: ANC）と産業商業労働者組合（Industrial and Commercial Workers Union of Africa: ICU）です。あとで説明しますが、この三組織は完全に分離して活動してい

たわけではなく、同じ人物が複数の組織で指導的役割を担うなど、相互に強いかかわり合いを保っていました。

1920年代初期、ケープにおいてこれらの組織に参加していたアフリカ人エリートの多くは、白人と平等な立場で共存することを望んでいました。彼らの採用したガーヴィーイズムは、アフリカ人とカラードが「黒人」として統一し、影響力を増すことで、今ある社会の中での待遇改善を図り、白人との公平な共存を達成しようとするものでした。しかし、1924年に発足したヘルツォーク政権が人種差別的政策を推進するようになり、白人との対等な立場での共存への道が閉ざされると、かれらの訴えるガーヴィーイズムは白人の追放といった急進的なものに変化していきます。

3. ヘルツォーク政権発足以前のガーヴィーイズム

(1) 産業商業労働者組合（ICU）におけるガーヴィーイズム

さて、まずICUにおけるガーヴィーイズムについて見ていきたいと思います。ICUは1919年1月、ニヤサランド（現マラウイ）出身のクレメンツ・カダリー（Clements Kadalie）を中心に、非ヨーロッパ人の港湾労働者によって結成されました。翌年に選出されたICUの組合長および副組合長は、いずれもガーヴィーイズムを掲げる西インド諸島出身者で、1922年に選出されたアフリカ人の組合長は、UNIAケープタウン支部の諮問委員を務めていた人物でした。カダリー自身も1920年に「私の真の目的は、偉大なるアフリカのマーカス・ガーヴィーになることである」と述べています[1]。

1920年7月、2週間にわたって開催されたICU会議において満場一致で採択された決議では、アフリカ人とカラードの統一が謳われ、非ヨーロッパ系の熟練労働者および非熟練労働者すべてを包括する組織としての性格が強く打ち出されました。

ICUは同年、UNIAメンバーとの協力の下、ケープタウンで『ブラック・マン』有限会社を設立します。同社はアフリカ人とカラード双方の労働者の向上を目的とし、『ブラック・マン（*Black Man*）』という新聞を発刊しました。同紙には、他地域のアフリカ人の状況を伝える記事がしばしば掲載されたほ

か、毎号にわたってUNIAやガーヴィーの活動を伝えるコラムが掲載されました。『ブラック・マン』はガーヴィーの元にも届けられていましたが、ガーヴィーは同紙を「南アフリカの『ニグロ・ワールド』」として紹介しています[2]。

「ブラック・マン」という名称からも窺えるように、ここではガーヴィーの謳う「世界の黒人の連帯」のなかに南アフリカのアフリカ人を「黒人」として位置づけ、ともにアフリカ全体の救済を目指そうというパン・アフリカニズム的姿勢が示されていました。さらに、彼らの想定する「黒人」の中には、カラードも含まれていました。「カラードと原住民」と題された記事では、カラードがアフリカ人の犠牲の上に存在していることが指摘され、団結することが求められています。「カラードよ！……白人の楽園に入り込むために、あなた方が今日蔑んでいる兄弟こそが、あなた方の背骨なのだ！団結せよ！[3]」

同じ時期、カダリーは『ブラック・マン』を編集していたサミュエル・ンクワナ（Samuel Nkwana）とともに、ケープタウン近郊で開催されたUNIAの集会に出席しましたが、ここでは南アフリカの「黒人」がUNIAの運動に呼応することが訴えられました。ンクワナは、以下のように述べます。「マーカス・ガーヴィーがわれわれとの連帯を示すために踏み出した第一歩に感謝する。……これはわれわれが始めた運動ではないが、海外にいるわれわれの子供たちから届いたものである。……解放と自由のため、あなた方アフリカ人は、［UNIAの運動に］応じるよう求められているのだ」。一方、カダリーは、以下のように発言しました。「われわれの親愛なる外国の兄弟は、アフリカの……すべての愛国心ある忠実な黒人が、自由への呼びかけに応えることを期待している。……ゆえにわれわれは、アフリカがいずれ救済されそのすべての息子が本来の地に回帰するという人種的プライドをもって団結しなければならない[4]」。

ンクワナは、第一回UNIA国際大会で採択された「世界の黒人の権利宣言」を「黒人のマグナ・カルタ」とし、パンフレットを作成して販売しました。ICUの一般会員は、しばしばカダリーを含めた指導者たちを、ガーヴィーの使者である「アメリカ黒人」だと考えていました[5]。「黒人の近代性」

を象徴する「アメリカ黒人」のイメージをもったカダリーたちは、指導者として熱狂的に受け入れられました。弁舌に長けたカダリーは、最高潮に達したときにコートを引き裂くなどのジェスチャーを取り入れることで、一般のアフリカ人を引きつけました。カダリーが超自然力を有すると考えるものもいたといいます[6]。

当時、南アフリカのアフリカ人にとって、「アメリカ黒人」というのは近代性の象徴でした。19 世紀末から南アフリカではエチオピアニズム運動と呼ばれる黒人教会独立運動がおこったのですが、ここでもアメリカの黒人教会がお手本のようにとらえられ、実際に AME 教会はエチオピア教会とよばれる独立黒人教会を吸収して、影響力を保っていました。

(2) アフリカ民族会議（ANC）におけるガーヴィーイズム

同時期、ANC の指導者もその運動の中にガーヴィーイズムを取り込んでいました。ANC は、1912 年、反人種主義とアフリカ人の団結を掲げて設立された組織です。創設時のメンバーは、ミッション・スクールで学び英米へ留学したエリートたちで、彼らの目指したものは、植民地体制そのものの崩壊ではなく、既存の社会の中でアフリカ人の権利を拡張することでした。ICU と同様にアフリカ人の団結、さらにはカラードをも含めた有色人種の団結を訴える際にガーヴィーイズムが採用されました。

ANC でガーヴィーイズムを推進したのはジェイムズ・タエレ（James Thaele）という人物です。タエレは、ほかの ANC 指導者と同様、ミッション・スクール出身のエリートでした。1888 年にバストランドの首長である父とカラードの母との間に生まれ、ミッション・スクールのラヴデール校に学んだのち、1913 年にアメリカ黒人大学のリンカーン大学に入学し、1917 年に文学士号、1921 年に神学士号を取得しました。その後、フィラデルフィアの高校で働いているときにガーヴィーの運動について知ったということです[7]。

タエレは 1922 年に南アフリカに帰国すると、積極的にガーヴィーイズムを推進していきます。1925 年まで ICU にも所属し、ンクワナが ICU を去って停止された『ブラック・マン』に代わって発刊された『ワーカーズ・ヘラルド（*Workers' Herald*）』の初代編集長となりました。

1922年、スマッツ政権は原住民（都市地域）法制定の検討を始めました。これは、各都市にアフリカ人居住区を設置することによって、都市へのアフリカ人の流入を防ぐものでしたが、タエレは、都市部に出稼ぎにきているアフリカ人農民を解放し、アフリカ人独自の経済発展を可能にすると考えて同法を支持し、ICUのンクワナとともに「アフリカ人農村定住計画」を創設しました[8]。しかしながら、この法律が都市部におけるアフリカ人の土地所有を禁じたことから、次第にアフリカ人の反発が高まることになりました。

ANCは1923年5月の年次大会において、都市部を含めた黒人の土地所有を求める決議を採択しました。ここでICUのンクワナを含む代表団10名が選出され、翌月、スマッツとの会談が実現しました。原住民（都市地域）法の改正を求める代表団に対して、スマッツは、アフリカ人居留地内における黒人の土地所有は認められるが、都市部は白人の所有地であると明言しました。ANC代表は、南アフリカが元来アフリカ人の土地であったというだけでなく、多くのアフリカ人が鉱山開拓や鉄道敷設において犠牲となり、南アフリカの発展に貢献してきたことから、アフリカ人もその分け前としての土地を有するべきだと主張しました[9]。ここに見られるように、彼らが求めていたのは植民地化以前への回帰ではなく、ヨーロッパ人による開発を認めた上での、その利益の正当な配分でした。

数日後、ANCはケープタウンで数百名の聴衆を前に、会談の報告会を行いました。最初の演説者はこの会談を失敗だったとし、どんな結果がもたらされようともパスの携帯を拒否するよう訴え、同意するものに起立を求めました。すると全ての聴衆が立ち上がり、拍手喝采となり、さらに、代表団の中心メンバーであったナタールANCのグメデによる涙ながらの求めに応じて、「原住民国歌」である「ンコシ・シケレリ・アフリカ」を合唱しました。これは現在の南アフリカの国歌です。グメデは、民族の違いを超えた黒人の団結を強く求めました。ほかの代表団メンバーも、黒人の権利のためには犠牲をもいとわないという戦闘的な演説を行い、カラードに対して、「黒人」としての自覚を促し、協力を求めました。最後にUNIAケープタウン支部長ジャクソンが演壇に登り、米国などアフリカ外の黒人との協力を訴えました[10]。

1924年、タエレは西ケープANC議長に就任し、これをガーヴィーイズ

ムの推進力として位置づけました。西ケープ ANC は、ブルームフォンテンの ANC 本部から財政的にも政策的にも自立しており、独自の支部を有するほどの大きな組織でした。

タエレは白い日よけ帽、白い手袋、白いゲートルという格好を習慣としていたといいます。ケンプとヴィンソンによれば、アフリカ人であるタエレが植民地の白人官吏の典型のような格好をすることで、白人の絶対的優越性を否定する心理的効果があったということです。「教授」の肩書きをつけたタエレは、アメリカなまりの英語で演説し、アフリカ言語を理解するにもかかわらず通訳をつけることもありました。英語が話せず文字の読めない多くのアフリカ人大衆は、タエレのスタイルの中に近代的黒人像を見て取り、指導者として熱狂的に受け入れたということです[11]。

タエレは1925年、『ニグロ・ワールド』に倣って命名した『アフリカン・ワールド（*African World*）』を西ケープ ANC の公式機関紙として発刊しました。ケープタウンにあった ANC の建物はニューヨークの UNIA 本部と同じ「リバティ・ホール（Liberty Hall）」と名付けられ、『ニグロ・ワールド』紙上に写真入りで紹介されました。また同支部は、1925 年 5 月から毎月第一日曜日を「ガーヴィーの日」とし、ガーヴィーが郵便詐欺罪でアトランタに収監されている限り、抗議集会を開いて擁護基金を募ることを決定しました。

タエレはアフリカ人が民族を超えて団結することを呼びかけ、さらにカラードとも団結することを訴えましたが、その際、「カフィル（Kaffir）」、「バンツー（Bantu）」、「原住民」といったヨーロッパ人によってつけられた呼称ではなく、「アフリカ人（African）」と名乗ることを提唱しました。実は ANC は 1912 年の設立当時は南アフリカ原住民民族会議（South African Native National Congress: SANNC）という名称だったのですが、1923 年にはアフリカ民族会議（ANC）と改称しています。さらに政府に対しても「原住民」のかわりに「アフリカ人」という呼称を使うよう要求しています[12]。

UNIA ケープタウン支部長が登壇したある ANC 集会では、ANC 指導者が、民族の違いを超えたアフリカ人の団結と、カラードとの統一を強く求めました。ここでは、黒人（black man）という言葉とともに、アメリカのいわゆる「血の一滴原則」のレトリックが使われました。「カラードの人々よ

……われわれの仲間に加わりなさい。どれほどあなた方が白くても、アフリカの血が一滴でも入っていれば、あなたは黒人（a black man）なのだ[13]」。

白人に対抗するため、タエレはアフリカ人とカラードだけでなく、インド人をはじめとするほかの非白人とも連帯することを訴えました。抵抗運動に関しては、マハトマ・ガンディーの主張する非暴力主義による消極的抵抗を採用すべきだとしています。タエレは、アフリカ人の待遇改善への手段として、白人の店をボイコットしてインド人や非白人の店を利用することを呼びかけ、『アフリカン・ワールド』紙にこれらの商店の広告を掲載しました。タエレの主催する集会には、多くのアフリカ人とともにインド人が参加していましたが、インド国民会議指導者ダス（C. R. Das）が死亡した際には、ダスをガンディーやガーヴィーと並べて賞賛しました。これに対して、集会に参加していたナタール・インド人会議（Natal Indian Congress）の事務局長もタエレに賛同する演説をし、アフリカ人、カラード、インド人が連帯して南アフリカにおける人種差別に抗議することを説きました[14]。

4. ヘルツォーク政権発足以後のガーヴィーイズム

1924 年の総選挙において ANC と ICU は、現政権である南アフリカ党のスマッツではなく、国民党のヘルツォークを支持することにしました。この背景には、これまでのスマッツ政権への不満のほか、ヘルツォークの主張する分離政策によってもたらされうるアフリカ人の経済発展に対する期待がありました。

しかし、政権についたヘルツォークは、支持基盤である白人貧困層救済のため、白人労働者や白人農民に有利な人種差別的政策を敷きました。ヘルツォーク政権に失望した ANC と ICU は活動を農村部に拡大させていくのですが、その背景には、農村部の困窮化があります。1913 年の原住民土地法で規定されたアフリカ人の土地は人口過多で荒廃し、さらに 1925 年に制定された原住民税開発法によって農民の税負担が増大した結果、アフリカ人農民は困窮の度合いを深めていました。このようななかで展開されるガーヴィーイズムは、白人を排除する急進的なものになっていきました。

(1) ICU におけるガーヴィーイズム

ICU は、地域的な労働運動から白人支配へ抗議する大衆運動へと、政治色を強めながら全国へ活動を広げていきました。組織が拡大した結果、ICU 本部はケープタウンからジョハネスバーグに移転され、本格的に全国規模の活動を展開していくことになりました。これにより、ケープタウンを中心に勢力を伸ばしていたガーヴィー主義者は ICU 内部で周辺化され、ケープタウンの ICU メンバーは、タエレ率いる西ケープ ANC に加わることになりました。

カダリーは、共産主義者の勢力が増大し、組織的に分裂していた ICU 内部で自らの立場を強化するため、白人の共産党員や、組織立て直しのために派遣されていた白人相談役を排除する目的でガーヴィー主義を採用するようになりました。1929 年、カダリーは ICU を脱退して独立 ICU（Independent Industrial and Commercial Workers Union of Africa: IICU）を結成しますが、ここでもガーヴィーイズムを唱え、独立教会と関係を深めながら、地方へ進出していきました。自由な黒人国家の建設というスローガンのもと IICU は自給自足を押し進め、黒人商店の経営を推進しただけでなく、白人商店のボイコットを行いました。しかし公権力の介入により、次第にその勢いは衰え、消滅していきました。

(2) ANC におけるガーヴィーイズム

一方 ANC では、アフリカ人大衆の支持を得るため、タエレ以外の指導者たちも積極的にガーヴィーイズムへの支持を表明していました。1926 年には、発行されたばかりの『マーカス・ガーヴィーの哲学と意見（*Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*）』が ANC 機関紙『アバンツー・バソ』で推薦書とされ、1927 年には ANC のレターヘッドに UNIA のモットーである「唯一の神、唯一の目標、唯一の運命（One God, One Aim, One Destiny）」のフレーズがつけられるようになりました。同年の ANC 会議では、郵便詐欺罪で収監されていたガーヴィーの釈放を米国政府に嘆願するよう、南アフリカ政府に要求することが決議されました[15]。

タエレは、ケープ州の農村部に進出し、労働条件や居住条件の向上などを

訴え、農民の組織化に努めました。その中で、タエレの主張は白人に対する排他的な傾向を帯びていきます。東ケープの役場職員は、タエレがANCのシンボルカラーを使ってアフリカ人の団結を訴えた様子を証言しています。

> 彼［タエレ］はブーケを着けていた。それを外すと、緑色の部分が上を向くようにして持って言った。「見えますか。このバッジも緑で、この花も緑であることが。これは白人が所有しているわれわれの素晴らしい緑の大地です。バッジの右側の部分は黒です。これはカフィルです」。そしてカフィル人を演壇上に上げて彼の右側に立たせた。さらに「反対側は黄色であることが見えますね。これはホッテントットとブッシュマンです」。そしてブッシュマンを壇上にあげた。彼らは真ん中で手を握り合い、タエレは以下のように述べた。「我々は手を取り合わなければなりません。……すると24時間もしないうちに白人は荷物をまとめて、元いた場所へと旅立っていくでしょう……」[16]。

ガーヴィーイズムを掲げて急進的なメッセージを発するタエレは、国内の平穏を乱す存在として、南ア警察当局による捜査対象となっていきました。1930年には人種間の敵対的感情を促進することを禁ずる原住民行政法によって有罪判決が下され、罰金が科されました[17]。このような中でタエレは軟化し、代わって西ケープANCでは共産主義を掲げる若手が影響力をもち始めました。タエレは自らの指導力保持のため、1930年に西ケープANCから共産主義者を追放しましたが、保守化によって支持者を失ったタエレは次第に影響力を弱め、その活動は再び注目されることなく、1948年に死亡しました。

以上で見たように、ヘルツォーク連立政権による人種差別的政策が強化されるなかで、ANCおよびICUは活動を全国に広げました。しかし、同時期に影響力を強めた共産主義者との内部対立のなかで、かれらによるガーヴィー主義は一貫性を失うとともに、白人の追放と結びつけられるようになりました。実は白人の追放というレトリックは、農村部におけるガーヴィー主義の骨子ともなるものでした。ANCやICUの指導者は、これから述べる農村部における運動の拡大に関わっていくようになりました。

5. 農村部におけるガーヴィーイズム

トランスカイの農村部では、エリアス・ブテレジ（Elias Butelezi）という人物が、バトラー・ハンスフォード・ウェリントン博士（Dr. Butler Hansford Wellington）と名乗り、「アメリカ人」と称してガーヴィー運動を展開しました。ウェリントンは、1899年にナタールで生まれ、ミッション・スクールで初等教育を受けていました。1921年にはラヴデール校に入学し、1学期間のみ在籍したのち、伝統的な薬草治療を行う医者として活動しました。

ウェリントンは、1924年から25年にかけて、南アフリカ内にある英領バストランド（現レソト）のクァクハスネックを拠点として医療行為を行っていました。この地にUNIA支部を設立していた西インド諸島出身者ウォレスの影響を受け、ガーヴィーイズムを説き始めたといいます。1926年頃からトランスカイ各地で集会を開き、徐々に支持者を増やしていきますが、ウェリントンは、ANCやICUの主張と同様、アフリカ人の白人支配からの解放を説き、そのために民族間の障壁を撤廃してアフリカ人が「ひとつの人々」となることを訴えました[18]。

アメリカ出身のUNIA指導者と称したウェリントンは、コーサ語を理解するにも関わらず、英語で演説を行って通訳を使っていました。UNIAやウェリントン運動は、「アメリカ」を体現するものとして考えられ、その支持者たちは、「アメリカ人（The Americans）」と呼ばれていたといいます[19]。集会では、ガーヴィー運動の三色旗が掲げられたほか、ガーヴィー運動のパンフレットが配布されました[20]。

ウェリントン運動に特徴的であったのは、当時トランスカイの農民を苦しめていた規制や重圧からの解放を、千年王国的な外部からの救済と結びつけた点です。トランスカイでは、1925～26年の干ばつで農作物の収穫量が激減し、食料品価格が高騰するなか、重税への不満がアフリカ人の間に浸透していました。1925年に制定された原住民税開発法により、人頭税、小屋税、家畜税の負担が増大したほか、薬品による牛の洗浄が義務づけられ、その費用が付加されていたからです。ウェリントン運動の指導者は税の不払いや牛

の洗浄拒否を説き、支持者はそれに従いました。トランスカイでは、以前から独立教会運動が広まっていましたが、ガーヴィーイズムにより、政府の規制に対する抵抗といった政治性が付加されたといえます。

ウェリントンは、アメリカ人が飛行機で到来して、南アフリカのアフリカ人を救済するという千年王国的な予言をしました。アメリカ人が南アフリカの白人を追放したのちには、アフリカ人は税を払う必要がなくなり、自ら国を統治できるようになるというものでした。白人が追放される際、運動の支持者でないアフリカ人も攻撃を受けるとされたため、支持者である証明として、UNIA のシンボルカラーであった赤、黒、緑の 3 色が施されたボタンが 2 シリング 6 ペンスで販売されました。集会の参加者によれば、人々はボタンの代金以上の金額を寄付し、多額の資金がウェリントンに集まったとのことです。信者は豚を殺すことも命じられました。アメリカ人が白人を攻撃するときに、豚に火が放たれるとされたためです[21]。

ウェリントン運動の集会は各村落の小屋の中で行われ、支持者以外の参加を禁じていたため、捜査当局に伝わりにくく、アフリカ人の間には、口コミで広まりました。多くの首長たちは、政府への忠誠を見せていましたが、運動の大きな発展が見られた場所では、首長の下に位置づけられる族長が運動を支持していました。ウェリントン運動を支持する族長は、集会の場所を提供し、ウェリントンのために宿泊場所を与えることもありました。マウント・フレッチャーの族長エドワード・ジビ（Edward Zibi）は、ウェリントン運動を支援したことから 1927 年 2 月に族長位を罷免されました。支持者は、首長の許しを乞うことなく集会を開催したため、首長の求心力を低下させ、既存の秩序を揺るがすものとして危険視されました[22]。

ウェリントン運動には、しばしば ICU や ANC との連携が見られました。1923 年にウェリントンが内務省にパスポート申請をした際には、ANC のタエレが、ウェリントンの保証人となっています。しかし組織として協力関係にあったというよりは、ICU や ANC のメンバーの一部がウェリントン運動に参加していたという状況であったといえます。

ウェリントンはその活動を通じて、「アメリカ学校」もしくは「ウェリントン学校」と呼ばれる学校を設立しました。政府の設置した学校に対する登

校拒否の呼びかけには、多くのアフリカ人が賛同しました[23]。約 150 名の生徒が登校していたツォロの学校では、わずか 5 名しか出席者がいなくなり、他地域でも同様の現象がみられたといいます[24]。ウェリントン運動は、学校建設活動を中心に存続していきましたが、アメリカ黒人の到来が実現化しないことで徐々に支持者を失っていき、加えて、資金不足のために教師たちへの給料支払いが滞ったことも衰退に拍車をかけ、1934 年 1 月、すべてのウェリントン学校の閉鎖が決定しました。

ちなみに、のちに ANC の要職を歴任して反アパルトヘイト運動の指導者となり、ネルソン・マンデラなどと共に終身刑を言い渡されたウォルター・シスル（Walter Sisulu）は、少年時代、トランスカイの地元に設立されたウェリントン学校に通った経験をもっていました。白人の不正義を非難し、黒人の自由を訴えるウェリントン運動により、村は一時的に興奮状態に包まれたと述べています。結局、地元民が授業料を支払えなかったことから学校は閉鎖に追い込まれ、シスルは 2 マイル離れたミッション・スクールに戻ったということです[25]。

6. おわりに

南アフリカにおけるガーヴィーイズムは、1920 年代の社会的変動のなかで、さまざまなかたちで受容されました。当初は、ケープタウンにコミュニティを形成していた西インド諸島出身者とともに、既存の社会における上昇を目指すアフリカ人エリートによって展開されました。ここでは、黒人の連帯というガーヴィーのメッセージに則って、アフリカ人とカラードとの団結を訴え、アフリカ外の黒人とも連携するパン・アフリカニズム的志向を保っていたといえます。

しかし、ヘルツォーク政権の誕生により人種差別的政策が徹底化されて白人との平等な共存社会への期待が裏切られ、さらに組織での内部対立が生じると、ガーヴィーイズムは、大衆動員と勢力拡大のための手段としての性格を濃くし、人種主義的側面が強調されるようになりました。

ガーヴィーイズムは、白人の追放を伴った南アフリカの解放という千年王

国的な救済思想と結びつき、本来のガーヴィー運動からはかけ離れた内容を含みながら、農村部において独自の展開をしていきました。ガーヴィーイズムの「南アフリカ」化とでもいえるでしょうか。社会が構造的変化を遂げるなか、その波に呑まれつつあったアフリカ人たちは、自らの不満を表明し、抵抗運動を支えるものとしてガーヴィーイズムを利用しました。ANC や ICU といった組織が設立されて活動を拡大し、アフリカ人ナショナリズムが萌芽しつつあるなかで、ガーヴィーイズムはアフリカ人たちによって変容され、その運動はやがて消滅していきました。のちの反アパルトヘイト闘争に直線的につながるものではありませんが、南アフリカのアフリカ人たちの独立闘争の前史として、決して看過すべきでない現象であったといえます。

註

1. Kadalie［1970: 220-221］.

2. *Negro World*, March 5, 1921 in Hill［1984: 228-230］.

3. *The Black Man*, vol.1, no.2 (August 1920).

4. Ibid.

5. Walshe［1970: 92］; Hill and Pirio［1987: 215-216］; Kadalie［1970: 54-55, 66-67, 80］.

6. Bradford［1987: 90-92］.

7. Kemp and Vinson［2000: 143-47］.

8. Vinson［2001: 110］.

9. *Cape Times*, June 2, 1923.

10. African National Congress, Agent's Report, June 8, 1923, Office of the Governor-General of South Africa, vol.1556, no.50/1058, National Archives of South Africa (NARS).

11. Kemp and Vinson［2000: 150-53］.

12. Kemp and Vinson［2000: 150］.

13. African National Congress, Agent's Report, June 8, 1923, Office of the Governor-General of South Africa, vol.1556, no.50/1058, NARS.

14. Report of Moodley & Dorasamy, March 8, 1926, NTB 7603, 25/328, NARS.

15. Hill and Pirio［1987: 236］; Walshe［1970: 167］.

16. Rex versus James Thaele, September 15, 1930, NTB 7603, 25/328, NARS.

17. Rex versus James Thaele, September 16, 1930, ibid.

18. Statement of Philip Hellier Paun, March 12, 1927, NTS 7604, 26/328, Wellington, vol.1, NARS.

19. D. W. Semple to the District Commandant, Umtata, December 27, 1927, NTS 7604, 26/328, Wellington, vol.1, ibid.

20. Statement by Daniel Dabulamanzi Mbebe, May 16, 1926, ibid.; Deputy Commissioner to the Secretary of the South African Police, January 31, 1927, ibid.

21. Magistrate, Butterworth, to the Chief Magistrate, Umtata, October 14, 1927, NTS 7604, 26/328, Wellington, vol.1, NARS; D. W. Semple to the District Commandant, December 10, 1927, ibid.; Edgar［1976: 103］.

22. Statement of Johannes Zibi, May 26, 1928, ibid. NTS 7605, 26/328, Wellington, NARS.

23. Lionel E. Harris to Lonsdale, March 11, 1927, ibid.

24. Lionel E. Harris to the Resident Magistrate, Tsolo, January 31, 1927, NTS7604, 26/328, Wellington, vol.1, NARS.

25. Sisulu［2003: 18-20］.

参考文献

Bradford, Helen. *A Taste of Freedom: The ICU in Rural South Africa, 1924-1930.* New Haven: Yale University Press, 1987.

Cobley, Alan Gregor. *Class and Consciousness: The Black Petty Bourgeoisie in South Africa, 1924 to 1950.* New York: Greenwood Press, 1990.

———. "'Far from Home': The Origins and Significance of the Afro-Caribbean Community in South Africa to 1930," *Journal of Southern African Studies*, vol.18, no.2 (June 1992): pp.349-370.

Edgar, Bob. "Garveyism in Africa: Dr Wellington and the "American Movement" in the Transkei, 1925-40," Collected Seminar Papers on the Societies of Southern Africa in the 19th and 20th Centuries, University of London, Institute of Commonwealth Studies, vol. 6 (1976): pp.100-110.

Hill, Robert A. *The Marcus Garvey and Universal Negro Improvement Association Papers*, vol.3, Berkeley: University California Press, 1984.

———. *The Marcus Garvey and Universal Negro Improvement Association Papers*, vol.9, Berkeley: University California Press, 1995.

———. *The Marcus Garvey and Universal Negro Improvement Association Papers*, vol.10, Berkeley: University California Press, 2006.

Hill, Robert A. and Gregory A. Pirio. "'Africa for the Africans': The Garvey Movement in South Africa, 1920-1940," in Shula Marks and Stanley Trapido, eds., *The Politics of Race, Class and Nationalism in Twentieth Century South Africa.* London: Longman, 1987.

Kadalie, Clements. *My Life and ICU: The Autobiography of a Black Trade Unionist in South Africa.* New York: Humanities Press, 1970.

Kelley, Robin D. G. "The Religious Odyssey of African Radicals: Notes on the Communist Party of South Africa, 1921-34," *Radical History Review*, vol. 51(Fall 1991): pp.5-24.

Kemp, Amanda D. and Robert Trent Vinson. ""Poking Holes in the Sky": Professor James Thaele, American Negroes, and Modernity in 1920s Segregationist South Africa," *African Studies Review*, vol. 43, no.1 (April 2000): pp.141-159.

Martin, Tony. "Marcus Garvey and Southern Africa," in Tony Martin, *The Pan-African Connection: From Slavery to Garvey and Beyond.* Dover: The Majority Press, 1983.

Roux, Edward. *Time Longer than Rope: A History of the Black Man's Struggle for Freedom in South Africa.* Madison: University of Wisconsin Press, 1948.

Sisulu, Elinor. *Walter & Albertina Sisulu: In Our Lifetime*. London: Abacus, 2003.

Vinson, Robert Trent. "Citizenship over Race?: African Americans in U. S.-South African Diplomacy, 1890-1925," *Safundi: The Journal of South African and American Comparative Studies*, issue 13/14 (April 2004).

———. "In the Time of the Americans: Garveyism in Segregationist South Africa 1920-1940," Ph.D. Dissertation, Howard University, 2001.

———. *The Americans Are Coming!: Dreams of African American Liberation in Segregationist South Africa.* Athens: Ohio University Press, 2012.

———. "The Radicalization of Cape Town's West Indian Community circa 1920: Garveyism and the Black Atlantic," a Paper presented at North Eastern Workshop on Southern Africa, African Studies Program, University of Vermont, April 30- May 2 1999.

Walshe, Peter. *The Rise of African Nationalism in South Africa: The African National Congress, 1912-1952*. London: C. Hurst, 1970.